マルメ大学研修報告書

理学療法専攻　B125156　西川翼

個人的には、最終日に行われた Clinical Group Supervision が一番印象に残っている。7～8 人の生徒と 1 人スーパーバイザーで生徒自身が抱えている実習や日常の苦しみについて話し、それに対してどうすればよいか意見を出し合い、その苦しみを取り除いていくというものだった。医療者が苦しみを感じていると、患者にもその苦しみが伝播してしまうので、このような取り組みを行っているそうだ。実際に私たちの何人かがやるのを周りで見学したが、自分が悩んでいることを他人に話し、その 1 つの問題に対して全員で考えるとすごく多角的に意見が出揃うし情報を共有できて、仮に自分が同じ状況になったときに思考の役に立つのではないかと思った。しかし、これはスーパーバイザーが進行を管理していないと、単なる愚痴の言い合いになってしまったり、臨床で感じる苦しみを話す場合、患者のバックグラウンドを理解できていないのに納得自己満足で終わったりしてしまう可能性もあるのではないかと感じた。自分を含め私たち日本人は自分の考えを他人と共有することをあまりせず悩みをためこんでしまうことが多いので、Clinical Group Supervision は臨床現場の雰囲気を改善したり、患者と接する際の切り口を増やしたりできるよい機会になるのではないかと思った。

事前学習の時点で、スウェーデンでは累計で 900Kr 払っているとそれ以降医療費は無料になることを知った。それは税金で賄われている。しかし、病院で治療を受けていない人は税金を取られるばかりで何の見返りも受けられていないのではないかと思っていた。短期研修のなかで、これに関する授業があったが、医療分野だけではなくて、教育分野において恩恵を受けられるということを学んだ。日本では高等学校まで授業料が無償であるが、スウェーデンでは大学まで授業料が無償であるのだ。学生は、学びたいと思えば親族に金銭の負担をかけることなく大学に行けるので、すごく素晴らしいことだと感じた。日本は、スウェーデンの人口約 900 万人に対し、はるかに多い人口で 1 億 2000 万人あるが、労働者人口もこれから減っていくし、なかなか国や自治体は税収を確保できない状況になっていくと思う。よって、この制度が日本で実現されることは難しいのだろうなと思った。

スウェーデン独自の医療研修施設 KUA では医師・看護師・理学療法士・作業療法士志望の学生によるチーム医療に焦点を当てた 2 週間の病院実習が行われていた。患者の緊急通

報時（シミュレーション人形を使用）ＰＴもベッドサイドに行ってケアの手伝いをしていたり、同じチーム内の学生が一つの部屋の中で話し合いを重ねて患者への治療法・接し方を考えていたりするそうだ。緊急通報時のケアの実習を行うグループ、それを観察するグループ、スーパーバイザーが一つの部屋で、実習をしていた。１事例が終わると、評価をして、今度は観察していたグループが実習に励んでいた。広島大学では、学科や専門を超えて、1 事例に対して、それぞれの 方面から知識を出し合って互いのチーム内での役割を学んでいくといった機会がない。まだ臨床実習にでていないので医療現場がどのように動いているかは、はっきりとわかっていないが、今チーム医療が叫ばれているので、こういう体験ができる機会を作ってほしい。理学療法士、作業療法士、看護師、医者など、それぞれがスペシャリストであり、対等にわたりあっているのがとても印象的であった。日本では医師の指導に基づいて理学療法士、作業療法士、看護師は動かないといけないが、スウェーデンではそうではない部分がある。学生の頃から KUA での実習でコミュニケーションを図っているからとか、給与の面でも、医師と他の専攻で日本ほど差がないからとかさまざまなバックグラウンドで対等にわたりあえているのだろうなと感じた。

KUA での実習の様子

コミュニケーションは全部英語であった。研修の初日は緊張や、英語でコミュニケーションをとる環境に身を置いたことがなかったりしたので、相手の言っていることを聞くのに精一杯であった。しかし日を追うごとに耳が慣れていき、少しずつではあるが自分の意見をちゃんと伝えられるようになっていくのを体験できた。今回の研修ではINUのCouncilの方々と交流する機会が 2 回あり、さまざまな国の人と話すことができた。その中で一番印象に残っている話は、「英語は道具だ」という話だ。留学したときに、やはりコミュニケーションは英語で、知識を得るため、人と話すための「道具」として英語を見なしていると言っている人がいた。私たちは、テストで点をとるための英語を今まで勉強してきて、道具ではなく「目的」として英語を扱ってきたということに気付かされた。これが恥ずかしがらずに話せるようになり始めたきっかけとなった。また、食事会に参加させていただいたときは、英語だけではなく海外の人って教養がとても身についているのだろうなという状況に出くわした。自分のテーブルでは、スコットランドが独立することについてどう思うかとか、家庭のことについてとかさまざまなことについて話が飛び交っていた。話している内容は理解できていても、その内容について考えたことなんてないし、もはや世界で何が起こっているかを知っていなかった。自分だけではなくて多くの人が同じ状況に立たされると思う。世界で対等に渡り合おうとするならば自分の専門分野に限らず、もっと世の中のことに興味をもつべきではないか考えた。

私は研修の中で、スウェーデンではLGBTについてどう考えられているかということを学ぶことを目的の一つとしていた。一般の人よりも、LGBT の当事者のほうが、状況をよく感じていると思ったので、現地で実際にコンタクトをとって話を聞いた。スウェーデンを含め北欧では、LGBT の権利が保障されているし、パートナーシップ法があるので多くの人が彼らの存在を認めているそうだ。街を歩いていると同性カップルを目撃することがあったが、不思議と違和感はなかった。日本では、まだ認知されていないことが多い。世界では LGBT を認めるような法律とか決議がなされているなか、日本でも求める人が多ければ、そういう決議が地方からでもいいので徐々になされていくべきではないのではないか。

今回の研修を通して、日本とスウェーデン、世界は異なるところがたくさんあって肌で感じることができた。医療制度においても、人々の考え方においても刺激をうけることばかりだった。スウェーデンの制度が素晴らしいといってそれを日本でも採用していくのは、今成り立っている日本の制度を根本から変えていくことになるので難しいのではないかと思った。今の日本の制度を尊重しつつ、改善できるところはやっていくのが良いと感じた。また、専攻だけではなく学年も越えて人との繋がりを増やすことが出来たし、他の専攻では治療のときどんなことをするとか、患者をどんな側面から捉えているかとか深い交流をはかることができた。学んだことを無駄にしないように、フィードバックや英語でコミュ

ニケーションをとる機会を求めていくために、これからも学習を続けていこうと思う。最後に今回この研修に参加できたことを改めて感謝したい。